

私と看護

私は大学に通う娘と、自立し遠い地に住む息子の二人の母です。息子が小学校に入学する年に離婚し、三人で力を合わせて生活を送ってきました。娘は、今年二十歳を迎えます。現在、私はその娘と共に同じ大学の看護学科の門をくぐり、看護師になるための勉強に励んでいます。席次が前後で、どの授業も娘の近くに座って講義を受けています。

私が看護の道を選んだのは幼いころの夢や看護師に憧れてという理由ではありません。育児をしながら働いて得た経験や、人との関わりを通して人間をもっと深く知りたい、知識を深めたい、そしてあの声があったからです。

阪神淡路大震災の日、私は特に被害を受けることもなく自宅で過ごしていました。水道は止まり、ガスも着きませんでしたが電気は通っていたので当時生後4か月だった娘のおむつをベランダで洗濯し、干していました。空は20キロほど離れた地域で起こった火事の炎の煙や煤でどんより曇り、時折黒い灰が風に乗って降ってきました。それは震災のすごさを物語っていました。そんな朝にもかかわらず夕焼けのような空に目をかすめ、けたたましい回転音を響かせ旋回を続けるヘリコプターに気を取られていると、何か大きな声が聞こえました。ベランダに面した道路に目をやると車から降りてきたばかりの年配の男性が私に向かって何かを叫んでいます。「こんな時に何をしとんじやい！」私はハッとしました。その時の私は育児の真っ最中で、子供を私が守らないといけない。私が今できることは子供の世話であるということに一生懸命でした。周りが見えないほど必至でした。景色や目先のことに目を向けてはいるものの、人の気持ちには気を配ることができていませんでした。私に罵声を浴びせた男性は、炎から逃げ、命からがらやってきた先のこの土地に、なんの変哲もない日常生活を送る人がある。その現実の違いに気持ちを言葉にのせて吐き出さずにはいられなかったのでしょう。私の胸の奥で今もその男性の言葉がこだましています。

震災の時、育児を理由にして何もできなかった自分を今の自分が慰めています。子供たちが巣立つころには、私は、人のために何かをできるひとになっていたい。人の気持ちを理解できるひとになっていたい。目の前の現実にも目を向け、悲しみを分け合うことができる人間になる、と私は決心しました。

今の私は、まだ看護師の卵です。看護専門職としての専門知識を増やすことを大切にしながら時間を過ごしています。限られた学生生活の時間のなかにでも、何か人の力になれることがあるのではと考えています。救急救命講習で学び、ボランティアに参加することで看護の学びを深めています。

今も自分が何もできないと嘆くとき、迷って立ち止まったとき「こんな時に何をしとんじやい」の言葉が聞こえてきます。私は、看護を学び、大きな声で答えることができるようになります。

「あなたの力になります」と。